倫子の不愉快

――『紫式部日記』五十日の祝い――

山本淳子

一　『紫式部日記』敦成親王五十日の祝いとその最終場面

二　『栄花物語』による採録

三　「幸ひ」という言葉

四　『栄花物語』の倫子像

五　『紫式部日記』同場面の意味

『紫式部日記』は、寛弘五年十一月一日の敦成親王五十日産養の儀の最終場面に、道長の戯言を聞いた北の方倫子が不愉快を感じて退室したことを書きとめている。彼女の行動の理由としては、夙に萩谷朴氏による道長妾紫式部関与説が提出されているが、その後詳細な検討は為されていない。しかし同記事は『栄花物語』にも採録されており、そのことと萩谷説はなじまない。倫子は紫式部とは関係なく、夫の言った「幸ひ」という言葉に不愉快を感じて退室したのではないか。またこの彼女の行為をめぐって、『栄花物語』はむしろ道長の「幸ひ」を描く立場からこれを採り、一方『日記』は矜持高い妻と彼女を尊重する夫との日常風景の一こまとして書きとどめたものと考える。

一　『紫式部日記』敦成親王五十日の祝いとその最終場面

彰子が入内して九年、ようやく誕生した宮は男子であった。『紫式部日記』はこの時の道長一家および周辺の人々の様子を至近距離から書きとどめている。繰り返されるその産養の記録の中でも、参会者の姿を最も多彩に伝えるのが、十一月一日、五十日の祝いの部分である。

『日記』によればこの夜、右大臣顕光は酔い乱れて几帳のほころびを引きちぎり、中宮大夫斉信は盃を手に彼を宥め、右大将実資は女房の衣の枚数に目を光らせた。記録等諸史料から窺われる、失態多く侮られていた顕光[1]、その場その場で立ち回ることの得意な斉信[2]、厳しいご意見番実資[3]といった、彼らそれぞれの人物像の、いわば典型の瞬間がここにはとどめられている。また公任は「あなかしこ、このわたりにわかむらさきやさぶらふ」と窺い、内大臣公季は道長から盃を受ける息子に嬉し泣きの涙を流し、一方権中納言隆家は戯れ声を上げて女房の手を引っ張る。公任は長徳・寛弘頃から道長に接近し、その手段として和歌をはじめ文化面の知識能力を駆使していた[4]。公季は世の主勢力に順応しつつ機を待つ公卿だった[5]。隆家が中関白家の一員で、その好戦的性格が長徳の政変すなわち一家の没落に直接かかわっていた[6]ことは衆知である。この夜の行動は、そういった彼らのありかたをそれぞれに反映した断片であった。

公卿たちは事実としてこのような行動を取ったのだろう。その意味で紫式部の筆は創作ではない。しかし彼女は、この夜彼らが取った幾多の行動の中から選択してこれらの行為を書きとどめたのであり、そこには筆録者としての主体性が介在している。即ち、親王五十日儀という場において主要公卿たちがそれぞれに示す姿をつぶさに観察し、各人の各人としての典型映像を切り取り、文章に固定する試みである。そのような観点から見れば、この夜の紫式部の観察眼は、細大漏らさぬ広さと緻密さとを以って人々に注がれていたと想像される。

さて、その祝いの記録の末尾に、式部は次のような一件を書きとどめている。式部の祝歌に唱和し、親王の行く末を見守る気概を詠んだ道長の自賛からそれは始まる。

「宮の御前聞こしめすや。つかうまつれり」と、われぼめしたまひて、「宮の御ててにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母も幸ありと思ひて、笑ひたまふめり。よい男はもたりかしと思ひたんめり」と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、さ

わがしきここちはしながら、めでたくのみ聞きゐさせたまふ。殿の上、聞きにくしとおぼすにや、渡らせたまひぬるけしきなれば、「送りせずとて、母恨みたまはむものぞ」とて、いそぎて御帳のうちを通らせたまふ。「宮なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ」と、うちつぶやきたまふを、人々笑ひきこゆ。

道長は中宮彰子に向かい、自らの歌を「つかうまつれり」とわれぼめし、さらに自賛の冗談を畳み掛ける。それを中宮は「めでたくのみ聞きゐさせたまふ」が、北の方倫子は「聞きにくしとおぼすにや」、席を立って行ってしまった。送らなくては、と道長は慌てて後を追い、非礼にも彰子の帳台を通り抜けがてら、弁解めいた冗談をまたしても呟き、人々の笑いを誘う。ここでの道長は、『枕草子』の原子入内章段或いは積善寺供養章段に見える、中関白道隆の「猿楽ごと」を髣髴とさせる。それは、今まさに栄花に浴する者が、周囲を巻き込み振りまく、屈託も邪気もない戯れということである。親王誕生によって今後の栄花がほぼ約束されたと思う安堵と喜悦が、彼にこのような冗談を言わせた。彰子は「めでたく」構えている。見守る女房たちから沸く笑いも明るい。父と娘と女房たちは、この祝いの日を当事者として迎えたそれぞれの典型映像として、やはり理解できる。

そんな中で一人、倫子だけは特殊な行動を取っているように思える。彼女は不愉快に耐え兼て席を立った。彼女は何を「聞きにくし」、聞いていられないと思ったのか。道長の言葉のどこに気分を害したのだろうか。また彼女の行動は、この喜びの場に水を差すものだったように感じられるが、その感覚は当たっているのかどうなのか。

二　『栄花物語』による採録

この記事については、つとに萩谷朴氏が『紫式部日記全注釈』[7]中で述べておられる。長文に至るが以下引用する。

道長の室倫子が、道長の冗談を聞くに堪えぬものとして、座を起ったのには理由がある。そのことは、既に第八節（引用者注・本文寛弘五年九月九日重陽節句記事への注釈部分）に、菊の着せ綿を贈った倫子と贈られた紫式部との間に、教養ある女性としての品位を保ちながら、むしろ陰にこもっていっそう激しい感情の火花を散らす、道長をめぐっての嫉妬の炎の燃えさかっていたことを指摘したが、今、その紫式部と道長とが、賀の歌を唱和したその口で、そして、その乙に取り澄まして貞女面をした夫の隠し女の前で、道長がぬけぬけと「よい旦那さんを持ったものだと思ってるんだろ

う」などと見え透いた戯れ言をいう。誇り高い正室として、これは我慢のならない屈辱である。もしそうでなかったら、多少のことは大目に見て、ニコニコ笑っていなければなるまいお祝いの席を、四十五歳の分別盛りの倫子が、プイと席を起って行ってしまうはずがないのである。さらにもし、これが、親娘三人水入らずの席だったら、道長の自慢話は、倫子にとっても共に楽しい無邪気なものであったに違いない。かりに周囲に侍女たちが見ていたとしても、気をつかったり、恥ずかしがったりするほどの年齢でもなければ、身分でもないのである。やはり、そこに紫式部が同席しており、その紫式部が道長と関係があって、倫子が既にそのことを感づいていればこそのハプニングであったわけである。（上巻四九二―四九三頁）

氏は紫式部が道長の妾であったとの見方に立ち、北の方倫子と紫式部の間に道長をめぐる確執があったことを、ここに読み取ろうとされる。引用部前半にもあるが、氏の説の根拠はもっぱらこの部分を遡る九月九日記事中の、倫子から贈られた菊の着せ綿に対する紫式部の歌の解釈、また倫子の言動への解釈にあり、そこに見出された確執関係がここでも繰り返されているということである。魅力的な説であることは間違いない。しかしこれをそのまま肯うには、多少抵抗を感じざるを得ない。その理由は、一つにはこの記事が『栄花物語』に採取されているという事実である。以下、このことについて暫く考えてみたい。

彰子出産からこの年の豊明節会まで、『栄花』はその記事のほとんどを『紫式部日記』に直接取材している。ただその記述においては、原資料を切ってつなぎ合わせるだけの作業ではなく、『栄花』独自の取捨選択やアレンジが施された。『栄花』には『栄花』の歴史叙述の論理があったためである。例えば『紫式部日記』はこの日記独特のものとして筆者紫式部の憂愁を描くことがあるが、その部分は基本的に『栄花』には採られない。時に個人的感情を書き留める箇所はあるが、それは例えば親王の五日の産養、公卿から盃を受けて詠歌を命ぜられる事態を予想して歌どもあり、「女房、さかづき」などあるをり、いかがはいふべきなど、くちぐち思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ

「四条の大納言にさし出でむほど、歌をばさるものにて、こわづかひ用意いるべし」など、ささめきあらそふほどに、ことおほくて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてもささでまかでたまふ。

（『日記』九月十五日）

との記事を

「女房、盃」などあるほどに、いかがはなど思ひやすらはる。

めづらしき光さしそふ盃はもちながらこそ千代をめぐらめ

とぞ、紫ささめき思ふに、四条大納言簾のもとにゐたまへれば、歌よりも言ひ出でんほどの声づかひ、恥づかしさをぞ思ふべかめる。（『栄花』巻八「はつはな」）

とするような形でなされている。女房たちが「四条大納言公任の前では和歌の詠み上げ方を心積もりしなくてはならない」と囁き合う理由は、『日記』には書かれていなかった。それを『栄花』は、傍線の「恥づかしさ」の語を補うことで、紫式部の彼への畏怖によると説明し得ている。また『日記』は点線部のように、結局盃と詠歌がなく歌は空振りだったと記すが、『栄花』はこれを採っていない。式部が公任を畏れ敬うことは当夜の客を称美し結果として祝儀全体の晴れやかさを記すことにつながる。しかしその歌が不発に終わったことは、祝儀全体には関係がない。『日記』敦成誕生関係の記事を『栄花』が『栄花』の論理で選択しアレンジするとは、第一にこのように道長の晴事を示し、或いはより際立たせ、一方そのために特に必要の無いものは外すということが大枠だった、ひとまずそう見てよいだろう。

ならば問題の箇所である。『栄花』の本文を確認してみる。

殿の御前、「宮を女にて持ちたてまつりたる、まろ恥ならず。まろを父にて持ちたまへる、宮わろからず。また母もいと幸ひあり、よき夫持たまへり」など、戯れのたまはするを、上はいとかたはらいたしと思して、あなたに渡らせたまひぬ。（巻八「はつはな」）

道長が戯れの言葉を発し、それを倫子は「いとかたはらいたし」として退室した。『栄花』が『日記』から取ったのはこれだけである。『日記』にはこの後、彼女を慌てて追う道長の姿と弁解めいた冗談が記され、それが女房たちを笑わせたとある。『日記』内容全体を読めば、倫子退場によって一瞬しらけた場が彼の道化者的行為によって和んだとも解しうる。が、『栄花』はこの道長の後追いも冗談も採らず、すぐに内裏参入の準備記事に移っている。つまり『栄花』はこの記事を、倫子が軽率にも損ねた祝賀の空気を道長が機転によって繕ったという、道長賞賛記事の一種として採録したのではない。夫婦の間に或る種の感情の齟齬が起こった、『栄花』の記事は確かにそのようにしか読めない。ではその齟齬が、萩谷説のように紫式部と道長との男女関係に正妻倫子が怒りを露にしたということであっ

た場合、その内容は『栄花』の作品論理にとって妥当なのか、どうなのだろうか。

『栄花』には、次のように道長と彰子女房との関係について記した部分がある。

殿の上の御はらからに、くわがゆの弁といひし人の女いとあまたありけるを、中の君、……このごろ中宮に参りたまへり。……殿の御前御目とまりければ、ものなどのたまはせけるほどに、御心ざしありて思されければ、まことしう思しものせさせたまひけるを、殿の上は、こと人ならねばと思し許してなん、過ぐさせたまひける。

（巻八「はつはな」）

まず確認したいのは、道長が娘の女房を寵愛したという事実は『栄花』にとって不採用の対象とはならなかったということである。道長の女性関係を排除する価値観は『栄花』には無い。ただ、そこにおける倫子関係の記述には配慮が働いただろう。右の記事の倫子は道長とその女房との関係を黙認したとされる。それは彼女が倫子の姪にあたり「こと人ならねば」という理由によったという。では道長の相手が倫子の親戚縁者でなかったらどうだったのか。それが次の事例である。

かの花山院の四の御方は、院うせさせたまひにしかば、鷹司殿に渡りたまひにければ、殿聞しめして、かれをもがなとは思しめしけれど、思しもたたぬほどに、殿の上ぞつねに音なひきこえさせたまひけれども、いかなるべいことにか、思し立ちがたかりけり。

（巻八「はつはな」）

「花山院の四の御方」は藤原為光の四女で、出家後の花山から寵愛を受けていた。花山の死後、道長は彼女に対し「かれをもがな」と思った。この所望は、形こそ女房としての出仕を望むものではあれ、実は寵愛の相手として望んでいたもののようである。同じ「はつはな」が事の続きを記し、道長女の相手役女房として彼女が仕えて後、道長は「御心ざしいとまめやかに」寵愛し、彼女への待遇は「家司などもみな定め、まことしう」、召し人でなく本格的な妻の一員の扱いだったという。この件に倫子は、傍線部のように「殿の上ぞつねに音なひきこえさせたまひけれども」と関わっている。夫の意向を知りつつ、それに沿って相手に出仕を働きかけているのである。後日談でも「殿の上の御消息たびたびありて、迎へたてまつりたまひて」と倫子が積極的だったこと、それが為光四女を動かしたことを記している。

二つの記事に共通して、倫子は夫の女性関係に対し鷹揚な態度で臨んでいる。このことは、こういった倫子を記すことは少なくとも倫子の不名誉を記すことにならないとい

う、『栄花』の論理を示すのではないか。

ただし、相手が女房ではなく、有力な人物の場合は話が別である。道長は源高明の女明子とも結婚関係にあったが、『栄花』巻三「さまざまのよろこび」は倫子がこのことを、「ただならましよりは」何事もなかったよりは辛い、と思ったと記す。だが同時に、彼女は「おほかたの御心ざまいと心のどかに、おほどかに、もの若うて、わざと何かとも思されず」だったと、表立った動揺を示さなかった様を記している。

参考として、道長ではなく長男頼通の場合だが、故具平親王女隆姫を正妻としつつ、三条天皇女禔子との間に縁談が起こったことがあった。これに対し隆姫乳母が貴船明神に祈ったため、明神が物の怪として頼通に憑き彼を病悩させた。禔子との話が破談となり頼通が回復した後、隆姫は「いともの恥づかしく」思ったと『栄花』巻十二「たまのむらぎく」は記す。乳母に対する管理不行き届きを恥じたというのである。一方彼女自身の態度については「ただともかくも思ほしのたまはせで」心ひとつに秘めていたと、記述は賞賛的である。隆姫にとってこの一件は、現内親王の降嫁によって正妻としての自分の立場が脅かされる、人生の危機であった。だからこそ、物の怪おろしの場には彼女の為に亡父具平親王の霊までが出現し、涙ながらに縁談の中止を懇請したのである。そういった事態においてでさえ、正妻当人は、少なくとも見かけ上平静でいることが嗜みだったのだ。

ちなみに、この直後の記事は頼通が彰子女房と通じ、懐妊出産なるも結局母子ともに死亡したとの内容を記す。そこには隆姫に関する記述は全く無い。隆姫には子がなく、外子の誕生は彼女個人の心を様々に掻き立てたとも憶測されるが、書かれていない。子が死亡し、結果として家系への影響がなかったことから『栄花』の関心には及ばなかったのだろう。女房と夫が通じるとは、『栄花』にとってこの程度のことなのである。

ならば問題の箇所について、もしもこの倫子の行動が萩谷氏の読みのように怒りと動揺を示すものだったならば、どうだろう。記事採取は倫子の不名誉に触れ、主家賛美という枠を破ることになったのではないか。それを敢えて『栄花』が書きとどめたとは、考えにくい。萩谷説には首肯できない。この一件を『栄花』が採取していることは、それが逆に一家の晴事にとってさしたる醜態事ではなかったことを示しているだろう。

ではこの記事は一体何を伝えるものなのか。また『栄花』はなぜこれを採取したのだろうか。

三　「幸ひ」という言葉

道長が冗談を言い、倫子が出て行く。その理由は道長の言葉そのものにあったのではないか。そう見れば、確かに角の立ちそうな言葉がある。「幸ひ」という言葉である。『日記』が書きとめ、『栄花』も採録している。再び二つの資料の、道長の発言のみを示す。

「宮の御ててにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母も幸ありと思ひて、笑ひたまふめり。よい男はもたりかしと思ひたんめり」

（『日記』）

「宮を女にて持ちたてまつりたる、まろ恥ならず。まろを父にて持ちたまへる、宮わろからず。また母もいと幸ひあり、よき夫持たまへり」

（『栄花』）

『日記』では、前半の彰子と自分への賞賛と、後半「母も」以下の倫子への言及の続き具合が曖昧である。倫子が「幸ありと思ひて、笑ひたまふ」である理由は、彰子の父として道長が立派であることにもあるように読める。しかし『栄花』は「また母も」と接続詞を補い、前者と後者の内容を区切っている。それにより意味を整理し、倫子は「幸ひあり」だった、なぜなら「よい夫もたまへり」だからだという道長の主旨を明解化している。自分がよい夫であることが倫子に「幸ひ」をもたらした。『栄花』の道長はそう言っているのである。

「幸ひ」は幸福・幸運を意味する語であり、多く賞賛の言葉である。しかしそれは、個人が自分自身心内で深々と味わう幸福感などといった、内省の語ではない。地位・待遇・富・子孫の繁栄など、いわゆる目に見える世俗の幸せについて、多くは他者、それも「世」など顔の無い不特定多数の人々による「噂」に用いられる評語である。最も重要なのは、工藤重矩氏が言われるように「運・僥倖という、人間の力を越えたものであり、そのもたらす幸せ」[8]を意味したことである。『栄花物語』にはそれを端的に示す例がある。

「世の中はかくこそありけれ。望めど望まれず、逃がるれど逃れずといふは、げに人の御幸ひにこそ」と、聞きにくきまで世にののしり申す。（巻五「浦々の別」）

一条帝のキサキ定子は長徳政変で衝動的に落飾したが、その後再び天皇に迎えられた。右は彼女がそういった状況で敦康親王を出産した時の記述である。望んでも望めない、逃げても逃げられない、それが人の「幸ひ」だとは、当時の諺であろうか。或いは時に当たって世が思いついた、気の利いた言葉でもあろうか。いずれにせよこれは、「幸ひ」は当人の意思に全く拠らぬものと言っている。それは「幸

ひ」の持つ、偶然性という属性による。

この偶然性は、時には意外性のニュアンスをまとって現れる。

小野宮に姫君一所おはしけるほど、大将殿添ひ寝させたまひて、心もとなく後ろめたく思されけるに、この北の方参りたまへれば、いとうれしく思して車より下りたまふを、われゐたちて下ろさせたまふほどの有様、世の中の古よりいままで世の幸ひにこれはこよなく勝れたりと見えたり。（巻十六「もとのしづく」）

「幸ひ」を享受しているのは小野宮の大将藤原実資の「今北の方」で、「幸ひ」の内容は夫実資自らによる厚遇である。「世の中の古よりいままで世の幸ひにこれはこよなく勝れたり」とは最上級の評価といえよう。右引用のすぐ後の記述によれば、この「今北の方」は実資の前北の方だった故婉子女王が在世中、彼女に仕えていた女房であった。女王の没後そのまま「この殿に仕まつりつきてありけるほどに、おのづからこの姫君の生れたまひにければ、今は北の方にてあるなりけり」。そのようないわば召し人的存在が、賢人でかつ「今日明日の大臣がね」の実資に厚遇され、生んだ娘も彼に「いみじき后がねとかしづ」かれる。これは常識では予想もつかない意外な事態である。それを実際に享受している彼女だからこそ『栄花』は最上級の「幸ひ」と評価した。この人物がどのように婉子および実資に仕え現在の今北の方の地位を獲得したか、その経緯などには「幸ひ」の語は頓着しない。この語が判断材料とするのは、ただ身分や出自や経済状況、妻ならその嫡妾、子ならどんな妻の第何子であるかなど、外観的かつ世俗的常識だけである。

道長女妍子病悩の際「さくせう」なる僧[9]が「幸ひ」と評された記述がある。

さて、さくせうといふ人、御物の怪など現したりとて、殿の御前、「これはおこなひいみじうすと聞きし者なれば、かならず験あらん」とて、阿闍梨になさせたまふ。「この御心地は、さくせうの幸ひなりけり」と、世の人申すめる。（巻二十九「たまのかざり」）

妍子の物の怪調伏に召された「さくせう」が、物の怪の正体を現した。更なる修法と完全な調伏を期待して、道長は彼を阿闍梨にした。世は今回の妍子の病気が「さくせう」の「幸ひ」だったと噂したという。この場合「幸ひ」は阿闍梨になった事を言う。妍子病悩という不幸な事態が、逆に彼にとっては阿闍梨昇進に働いた、というのである。「さくせう」には実力があったのだろうが、世はそれが彼を阿闍梨にしたと認め賞賛するようないい方をしていない。あくまで病悩が「幸ひ」となったと言っている。能力は前

からあったが、今それを発揮するチャンスとしての病悩がなければ阿闍梨就任は無かった。だから能力が「幸ひ」なのではなく病悩が「幸ひ」なのだ。その意味でこの評語は当人の能力を度外視した言葉である。「さくせう」本人がもし自らの力を恃んでいたならば、こう言われて不満を感じたかもしれない。しかしそのことに関心は払われていない。或いはこれは世にとって意外な昇進だったのかもしれない。本来ならば「さくせう」にとって阿闍梨は望み得もしない位であり、妍子病悩というまさに突発事によってたまたま獲得できたということなのではないか。世人の言葉にも、「申すめる」とぼかす地の文の表現にもそのニュアンスがある。

このように「幸ひ」という語は、或る人物の幸福な状態を言うものながら、それが偶然であり、時には意外な出来事であるとの潜在条件を持つ。それは本人が低位のものである場合に限らない。『栄花』には彰子のような貴顕の女性を「幸ひ」と評した例もあり、それは彼女の子が一条天皇の第二・第三皇子だったのに帝位に即いたこと、また彼女の存命中に孫までもが即位したことを指している（巻十三「ゆふしで」・巻二十七「ころものたま」）。この事態の実現には、引き続いての男子出生や第一皇子の後見の失脚など偶然性が多く関与している。幸運と言われても当然ではあった。そしてこの意味で『栄花』が最も「幸ひ」とするのが道長だった。正編に三十三例ある「幸ひ」「幸ひ人」の用例中、七例が道長を評するものである。うち一例は道長自身の発言中にあり、彼自身に自覚があったとされている。道長は兼家の五男、同母男子の中でも三男であり、兄の道隆と道兼が壮年で病没しなければ彼の政権はなかった。また道隆亡き後長徳政変で中関白家がいわば自滅的に崩壊するという事態がなければ、権力独占は難しかった。更に彰子が男子を産まなければ帝位は第一皇子で定子の遺児の敦康のものだった可能性が高く、その場合は彼が後見役を務めたとしても様々の危険要素が発生しえたであろう。道長は実に綱渡り的に政権を獲得したのであり、それはまさに「幸ひ」であった。

四　『栄花物語』の倫子像

問題は倫子である。『大鏡』には彼女を「幸ひ」と評する記述がある。

世の中には、いにしへ・ただいまの国王・大臣、皆藤氏にてこそおはしますに、この北の政所ぞ、源氏にて御幸ひきはめさせたまひにたる。　（下巻　道長上）

『大鏡』が舞台とする万寿二年当時、確かに源氏は藤原氏に圧倒されて久しかった。世継は二百年を生きた者とし

て、歴史を見渡す視点から、言わば鳥瞰的批評を下したのである。しかし『栄花』は、このように固定した一時点から過去を振り返る視点をとらず、基本的に記述内部の時間と同時進行している。[10] 先々の事実を知った目に記述が引きずられる箇所はままあっても、おおむね現在性を守ろうとする姿勢が見て取れる。すなわち、問題箇所の倫子についても、寛弘五年現在において、それ以前の歴史を踏まえた目で記述している。もちろんその時、源氏は『大鏡』のいうような存在ではなかった。

倫子の初登場は、巻三「さまざまのよろこび」の、道長との結婚の一件においてだった。そこでは彼女は「土御門の源氏の左大臣殿の、御女二所、嫡妻腹に、いみじくかしづきたてまつりて、后がねと思しきこえたまふ」姉妹の一人と紹介されている。道長の打診に父源雅信は「あなもの狂ほし。ことのほかや。誰か、ただ今さやうに口わき黄ばみたるぬしたち、出し入れては見んとする」と猛反対した。結局は倫子の母の積極的意向によって婚姻実現の運びとなったが、その時点でも雅信は「心もゆかず」であった。内心に娘と今上帝一条や東宮居貞（三条）との年齢を数え不釣合いと諦め、他の「さべい人などの、ものものしう思すさまなる」を探すが見当たらない。朝光を候補に上げるが、彼には妻がおり、ただそれはほぼ消滅関係にあるものの、別に煩わしい通い所があると、雅信妻が反対したという。雅信にとって道長は、妻の意見と消去法の結果、ようやく決めた婿であった。結婚後はさすがに丁重に扱ったが、これには逆に道長の父兼家の方が「位などまだいと浅きが、かたはらいたきこと、いかにせん」と思ったとする。このように、『栄花』が描く道長と倫子の門出は、時の摂政の子とは言え五男、将来の有無も見えない若輩者と、左大臣鍾愛の后候補との間の結婚であり、それも左大臣が折れる形でのものだった。

とはいえ、道長も捨てたものではなく、右の記述の前には「かうやんごとなき御心ざまを、おのづから世に漏り聞えて、われもわれもと気色だちきこゆる所どころあれど、今しばし、思ふ心ありとて、さらに聞き入れ」なかったとされている。別の口からは引く手あまたの縁談があった、しかし自ら思うところあって耳を貸さなかったというのである。つまりその思うところが左大臣源雅信女倫子との結婚だった。そして彼がこうした結婚を遂げた結果、兼家に仕える殿人の目には次のような傾きが生まれたという。

今二所の殿ばらの御北の方たち、ことなる事なう思ひきこえたるに、この殿はいとどもの清くきらかにせさせたまへりと、殿人も何ごとにつけても心ことに思ひきこえたり。

「今二所の殿ばら」は道隆と道兼、その北の方は高階成忠女貴子と藤原遠量女である。高階成忠は受領、遠量は師輔男とはいえ兼家らとは母が違い、役職も大蔵卿など地味な存在であった。彼ら二人の結婚と道長のそれとは豪華さにおいて圧倒的な差があった。しかもそれは、使用人の目にさえ事ある毎に痛感されることであった。

こうして『栄花』は、倫子をあくまで「ものの栄えある」名門の女性と描いてきた。巻八「はつはな」の問題箇所の少し前には、彰子懐妊記述に先立って、寛弘五年の正月風景として、妍子・威子・嬉子と過ごす倫子の描写に筆を割いている。時に倫子は四十五歳であったが、「二十ばかり」の様子で、「中宮（彰子）の有様とりどりに見え」、道長も乳母に向かって妻の若さと美貌をほめたと記される。この場面は、直後の彰子懐妊記事と合わせるとき、近い将来決定づけられる道長の栄花を予祝するものとして印象深い。彰子はこの年男子を産み、また妍子以下三人の娘は、やがて三条・後一条・後朱雀（東宮時代）妃となって道長の権力を支える。四姉妹は道長の権力獲得と存続を約束する最も有力な武器だった。そしてその四姉妹を彼にもたらしたのが、描写の中心にいる倫子であった。

つまり、倫子は道長を「幸ひ」にした人間なのだった。『栄花』正編が最もしばしば「幸ひ」と呼ぶのが道長の身の上であることは既にのべた。それは一つには兄二人の死や対抗勢力の失脚という事態によってもたらされた。しかしもう一つには、倫子が次々と女子を生み、彼に実質的戦力をもたらしたことがあった。彼女が持ち込んだ源氏の貴種の血、また土御門殿など莫大な財産も大きく貢献した。息子頼通の結婚の際に道長が言ったという有名な言葉「男は妻がらなり。いとやむごとなきあたりに参りぬべきなめり」（巻八「はつはな」）は、自身の経験から得た結婚観といえるだろう。倫子は道長の栄花にとって最大の功労者といって過言ではない。少なくとも『栄花』の一連の記述からはそのように読み取られる。

或いはこれは、現実の倫子に基づく造型だったのかもしれない。道長は自らの日記の中にしばしば彼女を登場させている。彼女は「女方」などと呼ばれ、道長とともに内裏の彰子を訪問したり、道長と別行動をとるときはその所在など動静が記されたりと、登場回数はかなり多くにのぼる。吉海直人氏はそれらの記述の向うに「後宮を巧みに操る倫子の政治家としての姿」を想像され、彼女を「道長のよき共同経営者」と評価されている。[11]

ならば問題の箇所、道長はこうした倫子のことを「母もいと幸ひあり、よき夫持たまへり」と言ったのだった。そして夫の言葉を聞いた倫子は「かたはらいたし」と席を立っ

た。彼女はむしろ「道長は幸ひあり、よき妻持たまへり」と認識していたのではなかったか。自分に「幸ひ」にされた筈の夫が、皇子誕生で多少はめをはずしたとは言え、逆に自らが倫子を「幸ひ」にしたのだという。その余りに手放しの自賛振りを、見苦しいと感じた。それが「かたはらいたし」であり、席を立つという態度ではなかったか。ここからは、夫道長と共に栄花への道を切り拓き家に大きく貢献したという倫子の自恃と、幸福の只中にいても軽率に過去を忘れてはならないという倫子から道長への戒めの気持ちを読み取るべきではないか。

そう読む時、『栄花』が描く倫子は一貫性を持つことになる。即ち、名実ともに貴種の誇り高い女にして道長の第一の戦力、そして彼の「幸ひ」の源泉ということである。また逆に、そうした倫子像が窺える格好の事件であるからこそ、『栄花』はこの記事を採録したものであろう。ちなみに、『栄花』中で倫子が「幸ひ」と評されるのはこの一箇所、世人や作者でなく道長によるこの言葉以外にはない。

五　『紫式部日記』同場面の意味

問題を最初に戻そう。この記事はもともと『紫式部日記』に記されており、『栄花』はそれを採取したものだった。では本来の『紫式部日記』においては、どのような意味を持つ記事だったのだろうか。先に触れたように『栄花』は『日記』から取材する際、独自に表現や内容に手を加えることがある。この記事の場合も、『栄花』自身のキーワード「幸ひ」に焦点をあてて、『日記』記事の一部のみを、しかも簡略化して採っていた。『栄花』の文脈をそのまま『日記』のものと取ることは危険である。『日記』本文に従い、その意味するところを読む必要がある。再び『日記』問題箇所を見よう。

「宮の御前聞こしめすや。つかうまつれり」と、われぼめしたまひて、「宮の御ててにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。母も幸ありと思ひて、笑ひたまふめり。よい男はもたりかしと思ひたんめり」と、たはぶれきこえたまふも、こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、さわがしきここちはしながら、めでたくのみ聞きゐさせたまふ。殿の上、聞きにくしとおぼすにや、渡らせたまひぬるけしきなれば

『日記』は筆者自身がその場で取材した臨場感を漂わせている。まず道長が彰子に声をかけ、「宮の御ててにてまろわろからず」云々と語る。それを式部は「たはぶれ」と受け取りつつ「こよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ」と解釈を付け加えている。ここにはさりげないが弁護のニュア

ンスがある。この「たはぶれ」はしらふで為されたのではなかった、本人は酔っており、しかもその「まぎれ」だったと言うのである。そう書くのは紫式部がその場の雰囲気に、たいしたことはないものの「さわがしきここちはしながら」と、微妙な乱れを感じたためであった。式部はこの時点で出仕後二年または三年と推測され、それほど長い年月をこの家族とともに過ごしてきたわけではない。しかし道長の有頂天は、その式部にさえかすかな顰蹙を感じさせるものだったのである。

彰子を窺うと、彼女はおっとりと「めでたくのみ聞きゐさせたまふ」であった。しかし倫子は出て行ってしまった。それが道長の言葉のせいであるとは、「聞きにくしとおぼすにや」のように、式部にもわかることだった。ただ前にも触れたように、『日記』の文面では「幸ひ」と倫子の不快は『栄花』ほど直結していない。道長の語と倫子の反応の間に式部の不穏な感覚や彰子の様子が置かれているため、倫子はある特定の言葉にというより、道長の戯れ全体にいたたまれなさを感じたようにも取れる。おそらく「幸ひ」が気に障ったのだとは、式部にも推測できただろう。彼女は『源氏』の中に「幸ひ」という語を多用しており、この語のもつ一種の非礼さを承知していた[12]。しかし式部はそれを指摘しない。むしろ「聞きにくしとおぼすにや」と、道長が原因であること自体を朧化する表現である。それは、一つは同時代読者なら道長の失言とわかるはずという、ポーズとしての朧化であったろう。また一つには、式部の年齢の浅さからくる、一家への遠慮もあったろう。しかし多くは、彰子出産の晴儀を記録しているのだというわきまえが働いたためだろう。

ならば式部には、この事件を全く記録しないという道もあったはずである。その道を取らずこれを記したのはなぜなのか。それはおそらく以下のシーンが切り捨てがたかったためではないか。

「送りせずとて、母恨みたまはむものぞ」とて、いそぎて御帳のうちを通らせたまふ。「宮なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ」と、うちつぶやきたまふを、人々笑ひきこゆ。

道長は倫子を見送って機嫌を取ろうと彼女のあとを追う。急いで彰子の帳台を走り抜け、道長は彰子に失礼をわびながら「親あっての子」だから許せと弁解し、女房たちが笑う。ここからは、道長が倫子に立たれて狼狽したこと、彼女の機嫌が道長にとって重要だったことがまず知られる。また「人々」が主人の道化めいた弁解を笑う様子からは、言葉そのものへの笑いもさることながら、北の方を追う主人を苦笑的に肯定する空気が感じられる。本稿は第二項で、

『栄花』がこの記事を、倫子が軽率にも損ねた祝賀の空気を道長が機転によって繕ったという、道長賞賛記事の一種として取ったのではないと述べた。それは『日記』でも同じと考える。倫子はあくまで「さわがし」い道長の言動に対応して席を立ったのであり、だから道長は後を追った。自らの失言で妻を怒らせた道長が、即座に妻に礼を尽くし、その関係を回復しようとする。周囲はみなわかっていて、そのような夫婦をよきものと見ている。『日記』は道長家のそうした姿を記しとどめようとしたのである。

道長と倫子がここに示すような力関係は、この時代の上級貴族のどの家族にも共通のことでは、決してないだろう。倫子の機嫌を尊重することは道長独特のあり方であり、また周囲の反応から見てそれは今この場に限ったことではなかったと考えられる。現に『御堂関白記』中には倫子に敬語を使う例が指摘されている[18]。日記においてまで敬うのだから、道長は常態的に倫子を重んじていたと察せられる。また同記録からは夫婦が協力して後宮対策を行ったことが見えるが、倫子は時として単独で行動することもあった。その場合道長は、自らの日記でありながら彼女の行き先や目的などをいちいち記している。倫子はおそらく、自ら品格を重視し、夫から恭しく扱われることに馴れ、また独自の意思で行動の取れる北の方であった。そしてそんな彼女を道長が実に尊重していた。問題の『日記』記事もそれをしのばせる一こまだったのである。

さらに看過できないのは、倫子の行為が道長の行き過ぎをセーブすることになった事実である。歌の自賛に始まって彼が羽目をはずしかけ、雰囲気の乱れが見えかけたとき、彼女は不快を示すことで結果的に道長を抑制したのである。この、品格重視・自己抑制という価値観が彰子後宮で善しとされていたことは、『日記』記録体の彰子描写や消息体部分の批評の諸所から読み取られるところでもある。そう考えるとき、倫子の行為は一家の喜びの場に水を差すものでは無かった。むしろ弛緩する気分を引き締めるスパイスとして、五十日賀の末尾に書き留められたのではなかったか。

一方彰子に注目すれば、父の自賛にも非礼にも動じず、終始おっとりと構えている。このように温和であることは、彰子のみならず彰子後宮全体の特質であった。おどける父、たしなめる母、その母をなだめる父、そして温和に見つめる、今日の主役の娘。笑う女房たちも含めて、やはり諸貴族の描写同様、それぞれの典型映像を鮮やかに切り取ったものだったと見てよいのではないか。

以上、『紫式部日記』および『栄花物語』の載せる些細な事件について考えてみた。『栄花』は「幸ひ人」道長と

彼に貢献する倫子を描き続け、『日記』は道長一家と彰子後宮の栄花だけでなくその内質を評価しようとする。それぞれの論理の中でこの事件は生かされたのだった。そしていずれにせよ、倫子は式部の存在に腹を立てたのではなかったと考える。

引用の本文は次に拠った。
『紫式部日記』…新潮日本古典集成
『栄花物語』…新編日本古典文学全集
『大鏡』…日本古典文学全集

注

① 『小右記』長和五年正月廿七日に道長の発言として「至愚之又至愚也」と言われる。

② 加藤静子「枕草子の背景――中関白家と斉信・成信――」（『東京成徳短期大学紀要』一四、一九八一年四月）

③ 例えば彰子入内に際しても諸卿・花山法皇の屏風和歌詠歌を「往古不聞事也」「不甘心事也」（『小右記』長保元年十月廿八日）、入内を送る諸卿を「末代公卿不異凡人」（同十一月二日）と批評するなど、辛口の批評を日記に多く記している。

④ 村瀬敏夫「藤原公任傳の研究」（『東海大学紀要文学部』二、一九六〇年三月）・竹鼻績「藤原公任の研究――公任集作歌年次考――」（『山梨県立女子短期大学紀要』四、一九七〇年三月）

⑤ 兼家の末弟。長徳三（九九七）年から二十年間、左大臣道長、右大臣顕光に次ぐ内大臣を勤める。寛弘五年時点既に在任十一年。のち治安元（一〇二一）年太政大臣に至った。

⑥ 『日本紀略』長徳二年正月十六日。また『小右記』同年四月廿四日。

⑦ 角川書店、昭和四十六年

⑧ 「源氏物語の個人・家族・社会――「さいはひ」「さいはひ人」をめぐって――」（『源氏物語研究集成六　源氏物語の思想』平成十三年　風間書房）

⑨ 同巻前文に「しやくせう」とも表記。人物については未詳。

⑩ 「かかるほどに年もかへりぬめれば」「はかなくて年月も過ぎて」「かくて」などの表現で時間の進行を表す。また記事内で記事現在を指して「今」と言う。

⑪ 「『御堂関白記』における「女方」について―道長と倫子の二人三脚―」（『解釈』三八―二、平成四年二月）

⑫ 原岡文子「幸い人中の君」（『源氏物語両義の糸――人物・表現をめぐって――』有精堂、平成三年）

⑬ 穐田定樹「御堂関白記・小右記の敬語・敬語表現（その五）」（『岡山大学教育学部研究集録』五三、昭和五十五年）